

サービスマーケティングで学んだこと

社会福祉学部 社会福祉学科 小崎大雅

活動先：NPO 法人 共育ネットはんだ

ゼミ：野尻 紀恵先生

1、自分の成長と気づき。活動から見えてきたこと。

共育ネットはんだの活動理念は、「共に育み 共に育ちあう」というものであるが、今回のサービスマーケティングを通して、私自身がどのように学び、変わることができたのだろう。

もともと障害を持つ人と全然関わりなかった私にとって、サービスマーケティングは、ほとんどの活動が不安で仕方がなかった。どのようにコミュニケーションをとっていけばいいのだとか私自身の中でいろいろと、辛いものがあつたのかもしれない。確かに、身内には障害を持った子はいたが、全く関わることをしてこなかった。そこで、今までの後悔のようなものも合わさり、関わるのが大切だと思った私は、バスツアーで訪問した共育ネットはんだに行きたい思い、共育ネットはんだを希望した。

活動初日、子どもたち友達のようにと楽しく過ごせればいいと思い活動に参加したが、後々友達という感覚ではダメなのだと気づかされることになる。活動初日に作品を作る際に、細かい作業が好きな子や嫌いな子など様々な子どもたちがいた。色はこの色でないと塗りたくないだとか、ここは絶対この色だということ子どもたちから言ってきたのである。その際に私は、すごくこだわりが強いのだと感じ、あまり口出しをしてはいけないものだと勘違いをしてしまったのだ。それから私が何も言わなかったから、何でもやっていいものだと思われてしまい、私がいけないことを、いけないといっても中々言うことを聞いてくれなくなってしまったのである。その時、私は友達のように楽しく接することも大事かもしれないが、「私たちは支援者である」ということの意味を考えさせられたのである。

活動2日目、活動はスポーツだったが、初日と違い体を動かしながらコミュニケーションが取れる活動だった。初日のようにならないように気を付けながら行動するようにしていたのだが、固くなりすぎてもコミュニケーションがとりづらいつらいと思い、友達のようにコミュニケーションは取るが支援者である振る舞いをしようと思ったのである。ダメなことは、ダメだと怒るときは怒り、一緒に楽しむときは思い切り楽しむと。活動2日目には、負けず嫌いな子やスポーツ万能な子など様々な子がいたのだが、私が受け持った子は物凄く負けず嫌いなのかシュートが入らないとすごく悔しがっていた。私なりのアドバイスをしてみて、またはいらないと私の顔を見ながら、「入らん」と悲しみと怒りが混ざったような感情で私にぶつけてきました。その時、私は物凄くうれしくなり、一緒に喜び、入らないとくやしがりながら、その子と有意義な時間を過ごせることができ、私自身が一番楽しんでたのかもしれない。

活動3日目、共育ふぁーむという活動。その活動にいたのは健常者の子どもであったが、

健常者であっても、障害を持っていてもどちらにしても子どもは物凄くかわいいということは、私の中で絶対だと強く確信した。ほとんどの子どもが幼く小さかったのだが、植物に向かう姿は私よりも貫禄があったように思えたのである。親御さんになぜこの活動に参加したのかという質問を投げかけたところ、小さいうちに自然に触れさせたいと思っていることや、現代の子どもは畑仕事などを行ったことのある人の方が少ないと思うから、貴重な体験としてこの共育ふぁーむに参加させたのだそうだ。その話を聞いて子どもたちには自然の面白さなどを知ってもらおうと、昆虫など捕まえて紹介などをしてみたところ子どもたちも興味津々ではなしを聞いてくれたのである。

最終日 SL 企画、今まで手伝っていた側から、仕切る側になり、皆で話し合いのような企画にするのかという話し合いだけで中々企画の内容が決まらず、全然前に進まない状態が続いた。水野さんからいろいろなアドバイスをもらい決まったのが、ミニ運動会だった。企画の流れは、エアロビクス、借り物競争、玉入れ、綱引き、フォークダンスというようなものだった。担当の企画を決めて、保護者や、子ども達に説明したのだが、私の担当はエアロビクスで踊りながら説明するのがものすごく難しいものだと強く感じさせられた。前の日まで必死に計画しダンスを考えていたが、障害を持つ子ども達には少し難しいと感じ、直前でガラッとステップを変えた。様々なトラブルがあったが、何とか保護者のみなさんにも楽しんでもらい、子ども達にも何とか楽しく踊ってもらうことができた。そしてこの時、感じたのは、言葉というものを、あまり知らなかった為、伝えるということは本当に難しいということである。借り物競争でも、他の競技でもそうだったのだが、どのように伝えればわかりやすいのかなど、前もって考えていたら説明ができるのだろうと思うのだが、瞬時にその時に合う言葉が出てこなかった為、わかりにくい説明になってしまったのが大きな反省点であると、私は感じているのである。

このサービスマーケティングを通して障害に対しての理解も深まり、支援者としての対応や、伝えることの難しさを知ることができたと思う。これからの私のさらなる成長の糧にできたらいいのではないかと考えている。

2、活動を通して見えてきた地域活動や社会活動

参加させてもらった活動の中に、ママぶりい部がある。ママぶりい部では、保護者との話をメインとした活動で、その時に様々な質問をさせてもらえた。保護者の方が、私がいなくなった後が心配だということを知り、誰かにサポートされながら生きている人にとって、そのサポート側がいなくなると生きていくことが困難になると私は思った。しかし、共育ネットはんだの活動の中身は、自立できるよう支援されている活動など、障害児にとってきっとこれから役に立つようなことばかりだと、私は感じた。食べるものを作る。食材を育てる。企画の中の行動がこれからの生きる糧になっていくのではないかとこのサービスマーケティングを通して強く思うのである。